

I -3. 地域の目指す持続可能な将来社会の在り方に関する調査

Study on Future Sustainable Communities

キーワード Key Word	科学技術予測、地域資源、産学官連携
	Foresight, Regional resources, Industry-academia collaboration

1. 調査の目的

低炭素化と高齢化の観点から、超高齢社会の両立をテーマに、2035年の地域の目指す持続可能な将来社会の在り方(社会の姿と実現方策)について調査を実施した。

本調査では、将来の高齢社会における「エネルギー」の観点から、科学技術の変化の兆候とその社会的影響、及びそれを踏まえた将来シナリオを作成するため、地域ワークショップを実施し、地域別の社会情勢、環境等の条件による違いに起因する地域ニーズを把握し、地域の将来像の実現に向けて期待される戦略・施策等の検討を行った。

2. 調査研究成果概要

(1) 調査の構造

本調査は、『低炭素社会と活力ある超高齢社会』の両立をテーマとして、2035年の持続可能な社会の姿とその実現のための方策を明らかにするため、山形県上山市、岐阜県加茂郡八百津町、福岡県北九州市、沖縄県島尻郡久米島町の4つの地域にて、産官学市民からなるワークショップを開催し、地域ニーズの把握等を実施した。本調査では、地域ワークショップの実施にかかる、①開催準備、②ワークショップの運営、③ワークショップ実施に係る事務処理、④結果のとりまとめを行った。



図1 地域ワークショップ開催地域

(2) 調査の内容

地域ワークショップは、2035年の地域の暮らしの姿(実現している姿)を議論し、このうち、高齢社会×低炭素社会において重要度の高い姿の検討を行った。また、検討結果(意見群)について、戦略・施策(個人、市民団体、企業、研究機関、教育機関、自治体、国)等の議論を行った。



図2 地域の暮らしの姿の検討

(3) 主な成果

① 地域資源を活かした持続可能な暮らし

地域ワークショップでの検討の結果として、複数の地域で地域資源を活かした持続可能な暮らしが、高齢化社会、低炭素社会の双方に寄与する姿として挙げられた。

例えば、温泉資源を有する地域では、必ずしも先端ではないものの、家事生活に資する科学が発展し、温泉の社会的効能を活用する地域が構築され、高度医療に頼らない健康づくりが図られている姿や、中山間地域では、溪流や山林地域の気候環境を活かし、地域参加型の新エネルギー開発や地域課題である雷の活用があげられた。海洋資源を有する地域では、海洋エネルギー、海洋水資源の活用とともに、遠隔医療により地域で暮らしを継続できている姿を示した。

② 地域で完結する闊達な高齢ライフの実現

地域資源を有する地域では、温泉の科学的効能が解明され、エイジング技術が発展している姿や、地域エネルギーを活用した公共交通システムを核に多世代の人々が町中で経済社会活動を盛んに行っている姿をあげた。

ワークショップでの議論の中には、高齢者の概念がなくなり、多世代が交流できる地産地消型ライフスタイルが構築し、年金に依存しない環境が確立されている姿が示された。

また、都市においても、AIやロボット技術の応用で、多世代居住・交流を実現し、孤立化しないまちの実現があげられた。

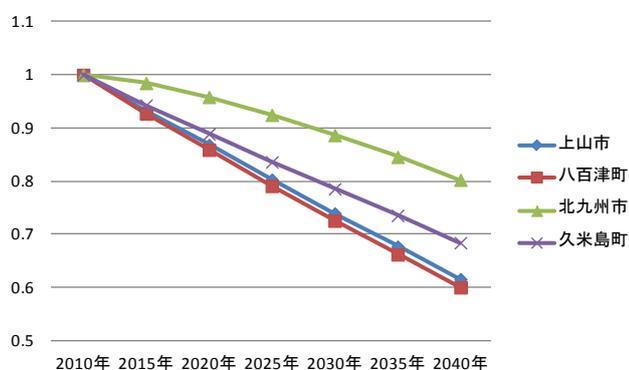


図3 地域の将来人口の推移(2000年を1とした場合)

出典: 国立社会保障・人口問題研究所の「日本の地域別将来人口(平成25年3月推計)」から作成